

【 特別の教科 道徳 】

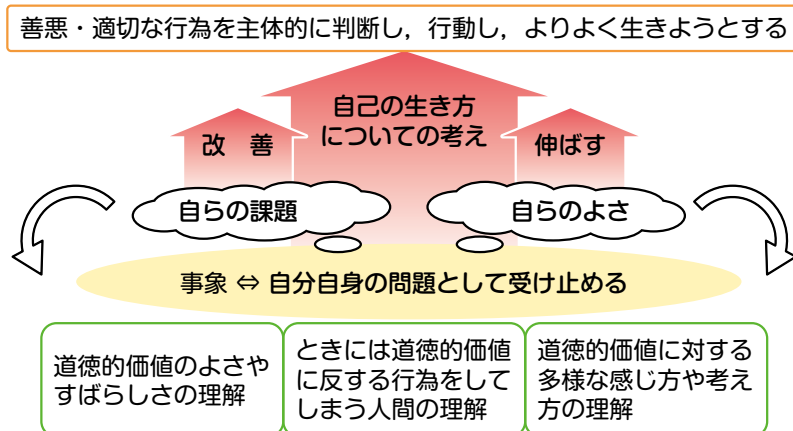
育成したい「思考力」

道徳的価値に関わる事象を自分自身の問題として受け止め、自らの課題を見つけたり、自らのよさを実感したりして、自己の生き方についての考えを深める力

道徳科の目標は、「道徳性を養うこと」であり、この道徳性を養うために行う道徳科の学習は、2つの要素に支えられている。1つは、「道徳的諸価値の意義及びその大切さ等を理解すること」、もう1つは、「自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深めること」である。しかし、例えば「友達と仲よくすることは大切である」と一般的に道徳的価値を捉えても、自分との関わりで捉えていなければ、その理解を深めることにはつながらない。道徳的な問題を自分自身の問題として捉え、その解決に向けて自分で考えたり他者と対話したりすることによって、「自分にとって友情とは何であるか」等と深く考えていけるのである。そして、道徳的価値を自分との関わりで捉え、自らの課題を見つけて改善につなげようとしたり、自らのよさを実感して伸ばしていこうとしたりするとともに、これからの生き方の課題を考え、それを自己の生き方として実現していこうとする思いや願いを深める力が、道徳科における「思考力」である。

この「思考力」は、道徳的諸価値の意義や大切さの理解を基にして育成され、「思考力」が育成される中で、さらに道徳的諸価値についての理解も深まっていくのである。

以下に実践例を示す。



第4学年「みんなのために尽くす」(教材名：『ポケットの中』)

育成したい「思考力」

集団のために自分がよいと思った行動をすることについて、自分自身を振り返り、できていることや実現の難しさに気づき、規則や約束を守ったり、自分がよいと思ったことを行動に移したるために大切なことを考える力

規則を守ろうとする気持ちの土台には、誰かのことを思い、自分がよいと思ったことを進んで行う気持ちがある。本教材に登場する老人は、子どもたちのために自ら進んでガラスを拾い、その行動を警官に尋ねられても謙虚な姿を見せる。

本実践では、老人の行動や気持ちを捉えた後で、床に落ちたごみを拾う等の、子ども自身が見つけた友達のよさをいくつか紹介した。子どもたちは、老人の行動を自分たちの行動とつなぎ、自分のこととして捉えていった。



【対立軸と名前磁石で立場を明確にする】

そして、老人の2つの発言に注目させ、「子どもたちのことを考えて行動するよさ」や、「人から褒められなくても自分がよいと思ったことをするよさ」に気付かせた。それらを矢印の左右に位置づけて対立軸とし、「自分にもあったらよいと思うのは、どちらですか」と選択を促す発問を行った。自分の考えをノートに記述させた後、黒板に名前磁石を貼らせることで、より大切に思うよさが人によって異なることに気づき、その違いについて意欲的に話し合った。子どもたちは、教材文中の子どもたちのためにガラスのかけらを拾う老人の思いに迫ることで自分の考えや思いを見つめ直し、誰かのことを思い、自分がよいと思ったことを進んで行うとはどういうことなのかを対話を通して考えていった。そして、自分ができていることやその実現の難しさに気づき、自分の生活を振り返りながら考えを深めていった。

道徳科の授業においては、教材中の人物に自分を重ね合わせて自らの課題を捉え、他者との対話を通して考え続けていく子どもを育成していきたい。

以下に、道徳科の授業づくりにおいて大切にしたいことを示す。

(1) 学習意欲を育てるために

子ども自身が自分と教材をつなぎ、道徳的価値に関わる事象を自分自身の問題として受け止められるようにするために、体験的活動を生かしたり、写真や図等の視覚的な支援や質問紙調査の結果の提示によって経験を想起させたりする。

子どもたちは、教材と類似した経験をしていても、それを思い出せなかったり、教材と類似したものと認識していなかったりする場合がある。教材中の人物に自分を重ね合わせられるようにすることで、子ども自身が自分と教材をつないで課題を捉え、学習意欲を持続させることができると考える。

先の第4学年の実践では、事前の質問紙調査によって、人が見ていないところでみんなのためにごみを拾ったり片付けしたりしている子どもたちの行動を調べ、授業の中で紹介した。教材中の老人の行動と似た行動が自分や学級の友達にも見られることを実感し、自分たちのこととして捉えることができた。

(2) 他者と協働しながら考え続ける力を育むために

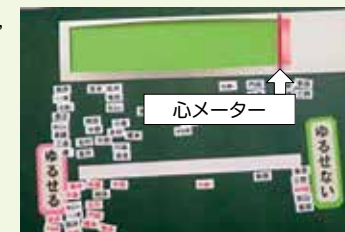
迷いを実感したり、多様な価値観を比較したりできるようにするために、集団内の多様な立場の存在を明らかにし、対立軸を明確にして選択を促す発問を行う。

互いの考えや思いを伝え合うことで、道徳的価値の自覚が深まっていく。道徳科においては、対話こそが他者との協働の中心であり、互いの考えを深めるために質問し合えるようにすることや、異なる考えを互いに表出し、主張し合えるような雰囲気づくりが重要である。

以下に実践例を示す。

第4学年「友だちのことを考えて」(教材名：『ししゅうのあるセーター』)

自分の大切なセーターにジュースをこぼした友達を許せるかどうか、その微妙な心の揺れ動きを心メーターの2色の割合で表せるようにした。そして、「許せる」「許せない」の2つの気持ちを対立軸として板書に示し、板書上に名前磁石を貼らせた。教師は「あなたがけい子さんなら、ゆきえさんを許すことができますか」と選択を促す発問を行った。こうして考えの異同が明確になり、理由を聞きたいという思いを互いに高め、対話が活性化していった。子どもたちは対話によって、「私は許せるけれど、許せないという人の理由も分かったよ」「同じ許せるを選んでいても理由が違う」ということ等に気付いたのである。



【心メーターと対立軸】